

岡部伊都子からの手紙

竹 長 吉 正¹

初めに

ここに紹介するのは、随筆家（エッセイスト）岡部伊都子からわたくしに寄せられた書簡全46通である。岡部は1923年3月6日に生まれ、2008年4月29日に亡くなった。生前、家族ぐるみで親しくさせていただいた、大切な人であった。

岡部の資料や遺品は、兵庫県の神戸文学館と京都の立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈された。わたくしの持っている資料も、そのどちらかに寄贈する予定である。

生前の岡部について語る機会は何度もあったが、今、岡部が故人となつてからは、なかなか心の整理がつかず、まとまったものが書けない。

ただ一言いうとすれば、岡部は好い意味で、上昇志向の強い人であった。また、編集者や出版人に大事にされた、恵まれた人であった。つまり、強力な、岡部ファンの編集者を持っていた。それは言うまでもなく、彼女の人徳と真摯さがそのようにさせたのだと思う。

わたくしは生前の岡部に「先生の伝記を書かせてもらいます。よろしい

¹白鷗大学教育学部

竹 長 吉 正

ですか？」と許諾をとった。そのとき岡部は「たいへんでっせ！」と言って、笑った。

伝記の完成は、いつのことになるかわからないが、とりあえず、身边にある資料を整理するうえで、ここに書簡類（手紙と葉書、メモなど）を公開する。

岡部伊都子からの手紙、葉書、メモなど

〈1〉 1971年（昭和46）5月23日

（はがき ペン書）

表 埼玉県南埼玉郡久喜町久喜本628の3

竹長吉正様

京都市左京区北白川西瀬の内町36の3

岡部伊都子

消印 左京 46・5・24 18-24

お心こもる書評^(注1)とお手紙を、ありがたく存じます。サンデー毎日^(注2)もおよみ下さいました由、6月号世界^(注3)をも、もしご都合よろしければお目通し下さいませ。

御体御大切に。

とりいそぎ御礼まで。 草々

注

- (1) 『ともしび』（埼玉県立羽生高校文芸部）第18号（1970年10月）に載った竹長の論考「女性の社会的関心について」。この論考で竹長は岡部の『おりおりの心』『鈴の音』を書評した。

- (2) 『サンデー毎日』1971年5月23日号に岡部は「〈シリーズ 日本人とは何か第4〉知らなかった朝鮮の心 ― 朝鮮人と日本人 ―」を執筆。
- (3) 6月号世界 岩波書店発行の『世界』1971年6月号。この号は「「復帰」を問う」という沖縄問題の特集であり、岡部はルポルタージュのエッセイ「先島を打つ波」を執筆。

〈2〉 1971年（昭和46年）6月13日

（はがき ペン書）

表 （同前）

消印 京都中央 '71・6・14 12-18

おハガキありがとうございます。

その苦しさで、書いたあとでもつねに身が責められるのです。朝鮮を書いても、沖縄を書いても、何を書いても、現実には何の行動もおこしていないし、現実のわたしの体力や実力ではこれがせいっぱいというのが、何とも情ないのです。

あまりにも大小数え切れぬ多さのことに腹が立つものですから。疲れめます。

サンデー毎日に読後感およせ下さいました由、拝読したく存じました。お二人の主婦のご感想、失礼ながら甘くて、さびしい気持でした。ご活躍を。

〈3〉 1971年（昭和46）10月17日

（封書 ペン書）

表 （同前）

裏 [印]（同前住所）

「「沖縄先島の早魃・台風被害救援の呼びかけ」文章=B4一枚に添えて」

竹 長 吉 正

御元気でいらっしゃいますか。

あまりに胸いたく、どうかひとりでも多くの方のお志を願っております^(注1)。

どうか、よろしく。

岡部

注

- (1) この年11月、カンパよびかけ（発起人一同）より礼状届く。「お願い致しました沖縄先島の早魃・台風被害救援カンパは、11月15日付で総計63万9,512円になりました。あまりに胸痛む沖縄先島の実情を、ご自分の痛みとして熱いお心を寄せて下さいましてありがとうございます。本土の新聞紙上に、ついに一枚の被害状況の写真ものらず、被害の具体的なニュースもなかったことを、銘記したいと思います。本土に住む者はほとんど知らされないままに見すごした大災害でありました。」 発起人一同の礼状にはこのように記されている。

〈4〉 1972年（昭和47）4月5日

（はがき ペン書）

表 （同前）

消印 大阪中央 '72・4・6 12-18

裏 （記載ナシ）

先日はご苦勞さまに存じました。

やはり、いろんな方面の仕事がありますので、できるだけ多くをお読みいただければありがたく存じます。

『いのちの襷^{ひだ}』『ずいひつ白』が入手できないといってこられる方がよくありますが、根よく古本屋さんを探して手に入れられた方もございます。真剣にわかろうとしてくださるお心を、ありがたく存じます。

〈5〉 1972年（昭和47）5月21日

（はがき ペン書）

表 〒346 埼玉県久喜市久喜新1216

竹長吉正

〒606 京都市左京区北白川西瀬の内町36の3

岡部伊都子

消印 左京 47・5・22 8-12

裏 （記載ナシ）

もう一篇は創元社刊『蜜の壺』の冒頭にてできます^(注1)。

教材にしてもらような詩ではありません^(注2)。他のはべつにお送りいたしません。

肌ざむい5月。沖縄破壊への恥と怒りと悲しみに重いことです。

注

- (1) 『蜜の壺』（創元社 昭和46年9月）冒頭のエッセイ「うちは鬼やった」の中に出てくる詩「うちは何やろ」。
- (2) 竹長はこの時、高校で国語を教えていた。高校生に読ませる詩教材を探していて岡部氏に発表した詩を教えてほしいと手紙に書いた。

〈6〉 1972年（昭和47）7月9日

（封書 ペン書き）

表 〒348 埼玉県羽生市羽生3579

羽生高等学校 竹長吉正

裏 〒606 （同前 ※印刷）

消印 左京 47・7・10 18-24

（用箋3枚）

お心のこもったご批評^(注1)ありがとうございます。けんめいに書き、いっしんにみつめようとしておられる気魄がにじみでていて、ありがたい読み手を得たことに胸うるおう思いでした。たくさんの方が逢おうとしてくださいますが、その姿勢は甘いものが多いのです。竹長さんが、坐ってすぐから次々と疑問質問をなげかけられたのは、それまでも十分に小著の数々をよんで、わたしの心に迫ろうとしてくださっていたからです。そうでなくてはあのように「知りたい」問いがつかずきません。その点を深くありがたく思います。

そして、この二回にわたるご文章^(注2)のなかでも、くりかえし、わたしの根本姿勢を追究しておられる。「自分も成長する民衆のひとりでありたい」「さらけださないが自分の弱さをかくさない」「人々とともに考えるが迎合しない」などをくみあげてくださっています。それをほんとにありがたいと思います。

お忙しい中から、詩「売ったらあかん」^(注3)をもご指導に使われました由、若い少女のみなさんが自分にとって何が大切か、人間にとって何が大切かを考えるよすがにしてくださっただけでもうれしいと思います。つねに自分を育てる先生がどんなに尊いことか。それにしても、厚かましいことですが、わたくしは竹長先生にわたしの書物を最初から全部読んでみていただきたいような気がいたしました。とうてい、それは勝手な願いですが、けれども。もっと深く知っていただきたいとも。

昨日、『二十七度線』はひとりよがりな文章だという批判をききました。息をのんで「三回もよんだけれど、軽々には何もいえない」という方が多い気配で、しんとした感じですから。否定であっても反響があるのは勉強になります。いゝ気なものであることは他ならぬわたくしがいちばんよく知っています。息ぎれするほどいそいで、あまりに多くの問題を濃密にいられたことも。もっとゆっくりと、たくさんの方の言葉を費やして書かなくてはいけないのかもしれないですね。

それに、「沖縄の味方をして恥ぢすぎる。沖縄差別なんてない」という反

撥も多いのです。差別する者は、自分が差別しているとは思えないのですね。わたしが沖縄をいたむようにはとうてい痛むわけにはゆかないという方が多く、私小説とされてしまいます。

抒情的で危険だという批判もあります。わたしは自分が抒情的であることを悪いことだとは思えません。抒情的でない方がどれだけのよさをみせてくださるというのでしょうか。闘いをしてくださるのでしょうか。などと、また激してきます。

わたしはしとしととやわらかな情緒で、「前衛を裏切らぬ後衛」として進んでゆきたいのです。

またのご批判をたのしみにお待ちいたします。ご労作、ありがとうございました。

※追伸

「革新知事」よかったこと、おめでとうございます。

注

- (1) 雑誌『きら』（発行事務局＝浦和市三室1106-22宮沢望方、「きら」の会）に発表した竹長の論考「岡部伊都子と沖縄経験」（同誌第72号 1972年4月）「いたみのわかる人」になりたい ―『二十七度線』読後―」（同誌第73号 1972年5月）を指す。竹長はこれらの論考が載った『きら』第72号、第73号の二冊を岡部に送った。
- (2) 前出(1)の竹長の二つの論考を指す。
- (3) 岡部の詩「売ったらあかん」は『二十七度線』所収「土着のころ」の文中にある。

〈7〉 1972年（昭和47）7月11日

（封書 ペン書き）

表 〒348 埼玉県羽生市羽生3579

竹 長 吉 正

羽生高等学校 竹長吉正

裏 ㊦606 (同前 ※印刷)

消印 左京 47・7・12 12-18

(伊都子用原稿用紙3枚)

書き忘れました。

72号^(注1)のご文章のカットは、どなたが書かれたのでしょうか。28という数字が書かれているので、やはり、ため息がでました。「27度線をよみました」というつもりで「28度線」、中には「38度線」という人が多いのです。

なお、同号21頁で、
4行目、ひよわな体から「身も心も沖縄ひとすじ」だということまでは、毎日のインタビュー記者氏の文章です。記者氏の表現が「」で引用、たとえば「身も心も沖縄ひとすじ」と引用されると、その場合がわたしがそういうか書いていることになってしまうように思われます。

「あまり長く……不幸の証明だ」はたしかにわたしの文章ですが、この同じ「秋雨前線」の文の中^(注2)で「ひとすじ」とされ「集中」とされる悲しみに、しぼりかすのようになることをいっています。自分で沖縄ひとすじと思ったり、いったりしていませんので、どうかご了承ください。本当にひとすじだったら、こんなに恥ずかしくないのでしょうか……。

すみません。前便(※を)ポスト(※)してから、うれしさに書き忘れたことを思いだして、あわてて書いています。次のご批判をたのしみにしています。

「いくら沖縄のことをいわれても自分のことにはならない」という反響が多くて、ゆううつです。反戦歌手ジョーン・バエズのドキュメンタリー映画をみました。徴兵拒否で連行される夫との別れからずっと、胸うつ地獄な映画でした。ごらんになりましたか？ いい歌でした。

その人は私と共に歩き

その声は私の胸に生き
その声は私の胸に語る
進むのだ　くじけずに
進むのだ　くじけずに　云々。

たいへんな大雨で、各地で水害がおこっていますね。そちらは大丈夫で
しょうか。ゆうべはあまりの雨音に、おちおち眠れませんでした。

どうか御元気で。失礼しました。

注

- (1) 雑誌『きら』（浦和、「きら」の会）第72号（1972年4月）の竹長の
論考「岡部伊都子と沖縄経験」の巻頭にあるカット。「OKINAWA」と
いうローマ字の横に、確かに「28」と書いてある。誰がこのカットを
描いたのか不明。「きら」の会同人の人か、あるいは印刷所の人か定か
でない。当時の岡部は過剰と言えるほど神経質になっていて、このよ
うな細部の誤りを見のがさなかった。俊敏になり過ぎていたとも言え
る。
- (2) 岡部伊都子「秋雨前線」（上）（中）（下）（『毎日新聞』1971年10月27、
28、29日）参照。

〈8〉 1972年（昭和47）8月9日

（封書　ペン書き5枚）

表　〒346　埼玉県久喜市久喜新1216

竹長吉正

裏　〒606（同前　※印刷）

消印　左京　47・8・10　12-18

- ①　バーナード・ショーのこと^{（注1）}は、読んだものではありません。まだ
病氣療養中の18歳くらいの時のこと、古本屋で赤い分厚い本をみつけ

て買ってきました。

『婦人のための社会主義解説』というバーナード・ショーの本だったと記憶します。ところが、何気なくその本を「こんなを買ってきた」とみせたら、母がその夜不安で眠れず、ついにわたしが刑事に連行される夢をみたとかで、「どうかその本だけは読まないでほしい」と申しました。それもわたしに直接いうと、わたしが素直に聞かないかもしれぬと心配して、従兄に頼んでその従兄がその本を私からとりあげるための説得をしました。そんなに心配しないでも、わたしには何がそんなに不安なのか、どうして刑事に連行される夢になるのかさえわかりませんでした。わたしはたいそう母思いでしたから、「そんなに心配なら」といってその本をぜんぜん読まないまま渡しました。戦争中で書物の検閲がきびしかった時代です。その時すこしでもそれを読んでいたら、もうすこし早く目がひらけていたのではないかと思いますか……。

- ② 高群逸枝全集^(注2)はとにかく女性史を地道に追求された尊い女人、及びその仕事として大切にしたい、学びたいと思って求めたものです。わたしには日記がやはり身近ですが、まだまだ読まない方が多いのです。からだが弱って体力も時間もなく、書く仕事をしている限り、本を読むことはできないと思います。学ぶところまでは読めていません。
- ③ 柳田國男氏の著作も、「妹の力」も娘のころに読んだだけで、それもほとんど意味もわからない状態でした。自分の仕事をするその関連で参考として目を通す程度です。ご想像に反して、殆んど影響は受けていないと思います。どういう接点があるのか、わたしにはわからないのですが、『海上の道』も存じません。
- ④ 娘のころには『般若心経講義』や『歎異抄^{たんに}』などすこしの宗教書はよみましたが、人物としてはほとんど知りませんでした。興味もありませんでした。その個人的歴史や思想をとくにくわしく研究したことがないのです。人物としてはそれぞれにいいと思うところとわからない

いところがあります。ひとくちに誰とはいえません。

- ⑤ 和辻氏^(注3)や亀井氏^(注4)のお仕事は娘のころ、古寺に関するものを拝見したと思いますが、ほとんど記憶にのこっていません。わたしはあくまで、しろうとの戦争を通過したあとのであいをしているので、戦争前の古寺巡礼のものとはちがう気がします。亀井全集をすすめられて求めはしましたが、ついに1行も読まず、「こぼし文庫」^(注5)に送りました。だから、ほとんど存じません。
- ⑥ 北川氏の著作^(注6)も全然知りません。

- 蔵書をお見せする気はありません。著者からの献本が多く、また、読みたくて本を求めているけれども、現在は（仕事を始めて以来はずっと）ほとんど、自分のための本が読めないのです。座敷に置いた本をごろんになっただけでも^(注7)、まちがった印象や期待をもたせたわけですから（例、高群全集）、書棚を人目にさらすことはいやなのです。

以上 7月29日付

-
- 今日、大和書房へ、9月にでる『秋雨前線』の校正を渡しました。今回ののは1文の末尾に発表年月をいれています。が、やはり、発表の誌名ははいていません。そのことで書房の編集者とも話合ったのですが、あなたのように特別に研究してくださる方はともかく^(注8)、一般の方はいちいち、わずらわしく、又、大ぎょうにみえるという意見です。

出典は明らかにした方がよいと思いますが、何しろ、わたしの文は短文が多く、じつにごたいそうな感じになります。発表年月だけでよいのではないかという意見が2、3あります。中には著名な新聞雑誌のものは省いて、ミニコミの分だけのせたらという人もあります。わたしはだいたい、あとがきも嫌いな方で、『ずいひつ白』はついに、あとがきなしでだしまして、これも「読者に不親切だ」といわれました。地域的なワケもありますし、とうてい全部の印刷物がわたし自身の手にもはいらな

いので困ります。でも一応わたしの手もとにきたものはスクラップしてありますが、スクラップし切れぬ単行本中の作品（数多くの著者が集っている本）などは切りぬかず、そのどこに何があるかさえ忘れています。そんなにご苦労なさって取材なさる価値があるとは思えません。ただ、スクラップを照応すればある程度、年月と発表誌がわかります。

- 「深夜の粥」は朝日新聞^(注9)でした。

どの本も編を先方に任しても最終的には自分で目を通しますし、初校は必ず自分がします。

- 毎月、発表の作名と発表誌を書いて送るというのは、ちょっとしんどいことです。

それだけでなく、通信物の整理や、メ切の仕事に追われて、ろくに休息するひまなく、すぐ弱って横になりますので時間がありません。このお返事を書くのも正直いって大仕事にはいります。お調べくださるのはありがたいのですが、あまりしんどいと、おこたえできにくくなりますので、おゆるしくください。

(※ 以下 メモ書き ご質問にこたえて)

神戸市……1953年12月31日 東灘区住吉町

柳767へ^(注10)

1958年6月…東灘区^{うそがわ}瀬川1304へ

1958年9月…東灘区本山町中野465へ

1962年4月…灘区青谷町へ

京都市……1964年10月…右京区鳴滝音戸山へ

1967年10月…左京区北白川西瀬の内へ

(アムステルダム、ハンブルグ、パリ、チューリッヒ。)

オランダはオランダ航空からの招待飛行^(注11)。

『週刊新潮』の週刊日記を書く仕事で。

1966年6月下旬から7月中旬まで

約16日ぐらいだったと思います。

不備ですが、これにて。

1972、8、9

注

- (1) バーナード・ショーのこと バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) はイギリスの劇作家・批評家。『婦人のための社会主義解説』は原題、The Intelligent Woman's Guide to Socialism (1928年)。
- (2) 高群逸枝全集 竹長が岡部宅を初めて訪問した折、応接間の本棚にこの本が鎮座していたので強い印象を受けた。よって、この本の愛読度について質問したのである。^{たかむれいつえ}高群逸枝 (1894-1964) は熊本県生れの女性史研究家。
- (3) 和辻氏 和辻哲郎 (1889-1960)。兵庫県生れの倫理学者。ここでは和辻の著書『古寺巡礼』を話題にしている。岡部の著作『観光バスの行かない……埋もれた古寺』(新潮社 昭和37年6月)『古都ひとり』(新潮社 昭和38年3月)等、古寺古都探訪の仕事で、その関連性を質問した。
- (4) 亀井氏 亀井勝一郎(1907-1966)。函館生れの文芸評論家。『大和古寺風物誌』の著が有名。
- (5) こぼし文庫 岡部が沖縄の竹富島を初めて訪れたのは1968年(昭和43年)。そこに家を求め、しばらく住んだが、体調不良で医師にかかる必要上、1972年(昭和47)、家を島に寄付した。島の人々はそれを図書館「こぼし文庫」として活用した
- (6) 北川氏の著作 北川桃雄 (1899-1969)。美術史家。^{いかるが}『斑鳩裸記』『秘

仏開扉』『大和古寺抄』など。

- (7) 座敷に置いた本をごらんになっただけでも 前出(2)参照。この本についての印象を、竹長は論考「「いたみのわかる人」になりたい——『二十七度線』読後——」（『きら』第73号 1972年5月）の冒頭で記している。

- (8) あなたのように特別に研究してくださる方はともかく このことに関して岡部は『秋雨前線』（大和書房 1972年9月）の「あとがき」で次のように述べている。「……ある青年の読者から「原稿初出の年月日と発表誌」を末尾につけてほしいと、熱心なおすめをうけました。わたくしは勝手者で、あとがきをつけるのさえ余分なことのようと思った時がありました。『ずいひつ白』はあとがきなして出版したくらいですが、「それは読者に対して不親切です」と注意されました。今回も発表誌は各誌にわたりますのでいちいち記さなかったのですが、年月だけはいれてみました。それぞれ発表の時点での誌名を記しておくのがよいのかもしれませんが。今後は考えてみたいと思います。……」

このようなことを岡部に書かせるほど当時の私（竹長）はばかげた質問と的はずれの要求で彼女を悩ませ、わずらわせた。

- (9) 岡部のエッセイ「深夜の粥」の初出出典は『朝日新聞』だったということ。竹長が初出をたずねたので、それに対する回答。
- (10) 岡部の居住地変遷についてたずねたことの回答
- (11) 1966年（昭和41）6月下旬～7月中旬、岡部がオランダ旅行したことについてたずねたことの回答。この旅行は岡部も述べているように、オランダ航空（KLM）からの招待旅行であり、その見聞は『週刊新潮』の「週刊日記」に連載された。この旅行記録は単行本『わが心の地図』（創元社 昭和44年7月）に所収。アンカレッジ（アラスカ）—— 北極 —— アムステルダムという東回りでヨーロッパに入り、オランダのほかに、ハンブルグ（ドイツ）、パリ（フランス）、チューリッヒ（スイス）を巡り、帰国した。約16日間の旅。

〈9〉 1972年（昭和47）8月17日

（葉書 ペン書き）

表 〒346 埼玉県久喜市久喜新1216

竹長吉正

表 〒606 （同前 ※印刷）

消印 左京47・8・17 12-18

10円切手貼り

大切なところ^(注1)へいってこられました。わたくしもはじめて原爆の図をみた時のおのきを忘れません。しかし、それ以上に事實はざんこくだったでしょう。描き切れぬものが……（文字と同じように絵の場合でも）あるはずですから。それにしても丸山^(注2)ご夫妻というすばらしい方々が日本にいてくださったことを感謝するほかはありません。もう10年ほども昔に一度大阪の画廊でお目にかかったことがあります、ものやわらかなあたたかなお^{ふたかた}二方でした。

今年度の連載中のものだけ、おしらせしておきます。『芸術新潮』に“お伽草子を歩く”^(注3)、『マダム』に“難波^{なにわ}の女人草”^(注4)、いずれも完結後、単行本になります。

注

- (1) 竹長はこの年8月6日（日曜）、埼玉県東松山市下唐子の丸木美術館を訪ね、丸木伊里・俊夫妻の絵「原爆の図」を初めて見た。その印象を岡部への手紙に書いた（8月12日投函）。
- (2) 岡部の文、原文に「丸山」とあるが誤記。正しくは丸木。
- (3) 「お伽草子を歩く」は連載後、『御伽草子を歩く』と題して、1973年（昭和48）4月、新潮社から刊行。
- (4) 「難波の女人草」は連載後、『難波の女人』と題して、1973年（昭和48）3月、講談社から刊行。

竹 長 吉 正

〈10〉 1972年（昭和47）10月10日

（葉書 ペン書き）

表 〒346 埼玉県久喜市久喜新1216

竹長吉正

表 〒606 （同前 ※印刷）

消印 左京 47・10・11 12-18

10円切手貼り

御手紙ありがとうございました。御元気のご様子、『秋雨前線』^(注1) はわりによくよまれているようです。只今、筑摩からです、『なぜ女か』のなかの「女だけのもの」30枚^(注2) を書きあげて、へとへとです。たいそうむづかしいテーマで、くたびれてしまいました。

次々と仕事がたまって、ため息がでる体力のおとろえです。

いまがいちばん明るい秋。やがて急激にさびしい秋となりましょう。

古い掲載紙などができましたが、おいりになりますか。送った方がよろしければ送りますが。

注

- (1) 『秋雨前線』は1972年（昭和47）9月、大和書房より刊行。初版が売り切れて再版の話でもあったのだろうか。
- (2) 筑摩書房刊の『講座 おんな 第一巻』（1972年12月）所収の論考「女だけのもの」。30枚という長い書きものであったのと、締め切りが迫っていて、苦しかったのであろう。

〈11〉 1972年（昭和47）12月7日

（葉書 ペン書き）

表上 〒346 // 久喜新1216

表下 〒606 （同前 ※印刷）

消印 左京 47・12・8 12-18

10円切手貼り

『きら』3冊^(注1)いただきました。次々と深く掘りさげようと努力なさってくださることをありがたいと存じます。

春頃、あるいは夏か、とにかく『秋雨前線』はまだごらんになっていない時の御作^(注2)のように拝見します。無常については『蜜の壺』の「無常と無状」に拠^よってお書きになっているのでしょうか。まだまだ書き足りないから無理だと思いますが、言いかたをかえれば全作品で無常を書いていると思います。

年末はいつごろに^(注3) なられますか。前もって打合せてください。

注

- (1) 雑誌『きら』の第76号（1972年9月）第77号（1972年10月）第78号（1972年11月）の3冊。
- (2) 前注(1)の第76号に竹長吉正「岡部伊都子と戦争体験 ―「美」観の変化を中心に」がある。この中で岡部の「無常感」に言及している。
- (3) 年末に岡部宅を訪問したいと伝えたことに対する応答。

〈12〉 1972年（昭和47）12月13日

（葉書 ペン書き）

表上 〒346 // 久喜新1216

表下 〒606 （同前 ※印刷）

消印 （判読不能）

10円切手貼り

30日午後3時とは、いかにもつらい日時^(注1)でございます。とてもお話している余裕がありませんゆえ、年末、30、31、はおゆるしください。

竹 長 吉 正

1 日は何時ごろまでこちらにいらっしゃるのか、また、ご予約がおりないのかわかりませんので、こちらも午前中は無理ですが、もしお時間がありますようなら、おでんわしてみてください。その時の都合がよろしければ、すこしでもお目にかかることにさせていただきたいと存じます。それではとりいそぎ、ご連絡まで。 草々。

注

- (1) この年の暮、京都へ出かける予定を立て、訪問日を打診したことへの応答。けっきょく、この京都旅行は実現せず中止した。

〈13〉 1973年（昭和48） 1月1日

（葉書 印刷）

表 〒346 … 久喜本628の3（※旧住所）

裏 〒606 （同前 ※印刷）年賀状スタンプ10円+1

1973年

お元気にご越年でいらっしゃいますか。

またたくうちに1年がたちました。急激に移りかわる時代のなかで、なんとか自分の心を生かしつづけたいと願うものでございます。

どうか御身体を御大切に遊ばしてくださいませ。 （以上、※印刷）

〈14〉 1973年（昭和48） 5月11日

（封書 ペン書）

表 〒346 // 久喜新1216

裏 〒606 （同前 ※印刷）

消印 左京 48・5・12 12-18

20円切手 罫ナシ箋2枚

御元気で何よりと存じます。

お手紙でご質問^(注1) いただきましたが、折あしく入院中で、お返事がお
くれました。

「花と人」の件、わかることだけ、お返事いたします。

① 「花と人」初出

『未生』（未生流の機関パンフ）1970年9月号、単行本収録『蜜の壺』
（創元社、版）

- ② 教科書にどういう気持でおとりあげになったのか、その担当者にお
話をききたいと思いました。ずいぶん昔、『ずいひつ白』のはじめの
「湿気の国」が教科書に使われたことがありました。試験に『おりおり
の心』の“晩秋”を使ったといって送ってくださった先生もあり
ました。「花と人」よりはまだ「湿気の国」の方が教科書にむく内容か
もしれませんが、わたしとしては、何にしても、学校で取り扱ってい
ただけのものとは思いませんでしたので、おどろいたことでした。や
はり担当なさった先生のお心の問題でしょうと思います。

③、④

やはり、心の置きかた、焦点のあわし方で、すっかり意味がかわる、
「観念的にものをみない」刻々のみずみずしい心で、自他を発見しつづ
けてゆきたいということでしょうか。

それではとりあえず要用のみ。

御元気で。

注

- (1) 角川書店版高等学校国語教科書『現代国語 二』（発行 昭和48年）
に所収の岡部文「花と人」について質問したことへの応答。この文章
についての初出や、この文章で伝えなかった作者の思い・願いについ
て質問した。

竹 長 吉 正

〈15〉 1973年（昭和48） 7月20日

（絵葉書、ペン書） 10円切手

表上 〒346 // 久喜新1216

下 〒 京都市左京区 岡部伊都子

裏 〈福沢一郎 8F牧神〉の絵

miyawaki galerie みやわきギャラリー

それでは8月25日の午後1時^(注1)においで下さいませ。このところ、ひどく暑くてろくに仕事がすすみません。夏休みのプランはおすすみですか。

それでは又、25日に。

とりいそぎお返事まで。

御大切に。

注

- (1) この訪問は実現しなかった。この年の8月、竹長には長女が生まれ、程なく肺拡張不全で入院したため。

〈16〉 1973年（昭和48） 8月29日

（葉書、ペン書） 10円切手

表上 〒346 // 久喜本628 - 3（※誤記、前住所）

表下 〒606（同前 ※印刷）

左京 48・8・30 12-18

先夜はおでんわで失礼しました。

その後、小さなお嬢さんのご容態は如何かとお案じいたしております。さぞ胸をいためておられることでしょう。小さなおいのちの必死のたたかいを思って、はるかにご無事ご成長をお祈りしています。

奥様はお元気にしておられますか。どうかくれぐれも御身体御大切に遊

ばして、最善をおつくしく下さいませ。御大切に。

〈17〉 1973年（昭和48）12月29日

（葉書、印刷※一部ペン書） 年賀状

表 〒346 久喜市中央1-15-12

裏 〒606 （同前 ※印刷）

左京48・12・19 12-18

1974年

ただならぬ転変相の世と、そして個と。

お心の灯いよいよ明るく、お元気にお過しますよう、お祈り申し上げます。

（※以下、ペン書）お子さま ご無事にご成育のご様子うれしく承りました。本年もさらに御大切に。

〈18〉 1974年（昭和49）2月4日

（封書、ペン書） 速達 90円切手

表 〒346 久喜市中央1-15-12

裏 〒606 （同前 ※印刷）

左京 49・2・5 12-18

久喜 49・2・7 0-8

罫入り便せん3枚

長い間、お手紙いたしませず失礼いたしました。「きら」とお手紙、まん悪く、昨年晩秋の郵便停止状況にはいつていまして、ずいぶんたってから拝見いたしました。まだ二十日間ほどの郵便物はいまだに片づかず、つい毎日届く方が先きになります。延引おゆるし下さいませ。

「きら」あらためて拝見いたしました。わたしも大好きな石垣りんさんの詩がうれしいのです。ハンセン病へのご理解もありがたく、市隠日録・公害録抄・屍の重さ^(注1) どれも大切なものですね。

昨冬から急激に迫った石油危機と物資かくれの商法^(注2) によって、どんなに多くの美しいもの（魂）が歪んだでしょう。ちっとも本質的に石油文明を拒否せず、毒洗剤がかくされると、毒でも何でも買いあさることがよきことになってしまうもろさ。つらいことです。

お手紙の日付は十二月十三日になっています。今日は二月四日、これはもうたいへんな時間がたっていて、その間どんなにお気がかりだったことでしょうか。序文の件^(注3) は、考えてみましたが、わたくしのことをとりあげて書いていただけてますのに、ご辞退するのは申しわけないのですけれど、やはり、ご辞退させていただきたいと思います。

いわゆる序文をお頼まれすることはよくあるのですが、それはどなたさまの場合でもご辞退しつづけていることがひとつ、書き手として自分の仕事を自分の願う方向に理解されることは何よりのよろこびですが、竹長さんはその得難い読み手でいてくださいます。それだけに、わたしは「書かれる」立場を大切にしたいということがひとつ。

どうかご了解いただけないでしょうか。せつかくのご希望におこたえいたしませぬわがままをおゆるし下さいませ。

注

- (1) 竹長の論考「市隠日録(8) — 屍の重さ —」（『きら』第86号 1973年8月）「市隠日録(10) — 公害録抄 —」（『きら』第88号 1973年10月）
- (2) 石油危機（oil crisis）は日本では1973年（昭和48）12月から始まった。原油価格と直接かんけいのない物資（トイレットペーパーや洗剤など）の買占め騒動が起った。
- (3) 戦争文学に関する著書の出版を計画していて、その序文を竹長が岡

部に依頼した。雑誌『きら』に連載した「戦争文学ノート」に岡部伊都子論を付加して、その目次を示した。その返事がこれである。岡部は序文を書くのを辞退した。当時、竹長はがっかりしたが、今にして思うと、岡部が辞退した理由がよく理解できる。自分がもし当時の岡部の立場だったとしたら、やはり辞退しただろう。性急に事を進めようとする若者のはやる心を落着かせようとする苦渋の姿がうかがえる。

〈19〉 1974年（昭和49）3月13日

（葉書、ペン書） 10円切手

表_上 〒346 久喜市中央1の15の12

表_下 〒606 （同前 ※印刷）

左京 49・3・14 8-12

書評コピー^{（注1）}、ありがとうございました。お返事がたいそうおくれて失礼しました「序文」のこと。それでは、戦争の思い出など短かく書かせてもらうことにいたします^{（注2）}。

「クーデター」まぢかという実感で、重い心はいよいよ重くなるばかり^{（注3）}。こわいことです。

春休みにこられたのも、もう2年前になるでしょうか。

どうかお元気でいらしてください。

お嬢さんは可愛くなられたことでしょう。

お大切に。

注

- (1) 岡部著『花の寺・京都』の書評を竹長が書いた。『埼玉新聞』1974年1月1日の「文芸文化」欄に掲載。
- (2) 前掲岡部書簡〈18〉及び、その注(3)を参照。この「序文」は実現しなかった。

竹 長 吉 正

- (3) 1973年（昭和48）12月ごろからの「石油危機」と「物質かくれの商法」による世情不安を大げさに表現したもの。

〈20〉 1974年（昭和49）10月12日

（書籍送付用封筒 ペン書） 50円切手＋5円切手

〒346 埼玉県久喜市吉羽1950の3

竹長吉正様

京・左京・北白川 西瀬の内

岡部伊都子

49・10・14 京都中央

お三方おそろいのお写真^(注1)

ありがとうございました。御奥さま

紀子さまも お元気そうに拝見して

うれしうございました。

いつぞや角川からでている「現代国語2」の教科書についてお問い合わせいただいたことがあります^(注2)、こんど先生用の「現代国語研究2」が送られてきて「花と人」のところをよみ、おどろきました。どこのどの先生が担当なさったのか存じませんが、書き手の心をここまで深く読みとり、また、方向を知っていただけているのに感激しました。

「母の友」「朝鮮文化」^(注3) 今日届いたところですので、お送りします。

注

- (1) 吉正、君子、紀子の三人。紀子6ヶ月の写真。
- (2) 岡部書簡〈14〉参照。角川書店発行の高等学校国語教科書『現代国語 二』に伴う教師用指導書『現代国語の研究 二』のこと。（昭和49年4月）
- (3) 雑誌『母の友』（福音館書店）に岡部は当時、エッセイ「小さなこだ

ま」を連載中。

雑誌『日本の中の朝鮮文化』第21号（1974年3月）に岡部は「高野山奥の院供養碑」を執筆。

〈21〉 1974年（昭和49）12月18日

（葉書、ペン書※但し、代筆） 10円切手

表上 〒346 久喜市吉羽一九五〇―三

表下 〒606 （同前 ※印刷）

左京 49・12・18 12-18

お問合せのお葉書きをいただき恐縮しております。「きら」と「ともしび」^(注1)及び可愛いお子様のお写真いただいております。通信物がたいそう多くたまりまして、どちら様にも失礼しております。御心配をかけましたが、どうかお許し下さいませ。本人からよろしくと申しております。どうか良いお年をおむかえ下さいませ。

注

- (1) 「ともしび」は埼玉県立羽生高等学校文芸部の部誌。竹長は当時、文芸部の顧問。

〈22〉 1974年（昭和49）12月31日

（葉書、印刷※一部、ペン書） 年賀状

表上 〒346 久喜市吉羽一九五〇―三

表下 〒606 （同前 ※印刷）

左京 49・12・31 12-18

底しれぬ重苦しさのなかで、また新しい年を迎えました。過ぎし歴史を学びますにつけても、刻々に創られてゆく只今の歴史が、陰影深く立体的

竹 長 吉 正

に感じられます。せめていのちある間は心生かしてと思わないではいられません。

本年も何卒よろしく願い申し上げます。

(※以下、ペン書) どうかお元気でよいお仕事をなさって下さいませ。

〈23〉 1975年(昭和50) 1月11日

(はがき、ペン書) 10円切手

表上 〒346 久喜市吉羽1950-3

表下 〒606 (同前 ※印刷)

左京 50・1・12 18-24

何彼とお便りいただき乍ら疲労に耐えかねては、失礼しております。書評^(注1) いただきました。お元気でよいお仕事を遊ばして下さいませ。

可愛いお嬢ちゃんや奥さまのお写真ありがとう。竹長先生はあまりにこやかにしておられません…… 緊張なさったのですか。くれぐれ 御大切に。

注

- (1) 岡部著『北白川日誌』の書評を竹長が書いた。『埼玉新聞』1974年12月12日の「文芸文化」欄に掲載。

〈24〉 1975年(昭和50) 3月19日

(葉書、ペン書) 10円切手

表上 〒346 久喜市吉羽高田1950-3

表下 〒606 (同前 ※印刷)

京都北 50・3・21 12-18

おハガキありがとう存じます。東亜の状況、金芝河氏^{キム ジ ハ}再逮捕^(注1)、国家

ぼうとく罪の法案など、心重いことばかりです。あくまで言論弾圧、人権じゅうりんと抵抗する韓国内の良心、理性を大切に尊敬して、学びたいと思います。それは、われわれがこちらで自国の在りようと闘わねばならぬということではかないのですね。

「埋火」^(注2)の著者は林一雄氏。住所は奈良県橿原市久米町931。でんわは07442-2-5076でございます。

紀子さん^(注3)、大きくなりましたとか。お可愛いことでしょう。お元気で。

注

- (1) 金芝河は大韓民国の詩人・思想家。1941年生まれ。1961年、軍事クーデターで登場した朴正熙体制を批判し、民主化運動をリードする。1970年、風刺詩「五賊」で拘束される。1974年、釈放されるが、手記「苦行－1974」を発表し再逮捕。金芝河の投獄に対し、サルトル、大江健三郎、鶴見俊輔などによる国際的な釈放要求の声が高まり、1980年12月、釈放された。
- (2) 『詩集 埋火』は1974年5月、明日香詩社から発行。A5判で238ページ、111篇の詩を収める。この詩集についての書評を竹長が『埼玉新聞』1975年6月12日の「文芸文化」欄に発表。
- (3) 竹長の長女。この時、1歳7ヶ月。

〈25〉 1975年（昭和50）11月4日

（封書、ペン書） 20円切手

表 〒349 （※誤記、346） 久喜市吉羽高田1950-3

裏 〒606 （同前 ※印刷）

左京 50・11・4 12-18

お元気のご様子、何よりでございます。小さなお方も おかわりありま

せんか。

ご研究の成果もあがっているようで、おめでとうございます。わたくしには戦争の記憶（明治・大正の）はまったくありません。それよりも震災にからまる話をくりかえし老人からきかされ、九月一日には必ずおむすびとうめぼしでした。父母だけで、老人のいる家庭ではなかったせいもあるでしょう。いまとなれば一言もきけなかったのは残念ですが。

「散るさくら のこる桜も 散るさくら」

「散る時が 浮ぶ時なり 蓮の花」

これは仏教的な教義としての言葉らしいのです。わたくしの行った女学校^(注1)は、山崎豊子さん^(注2)がくりかえし材料として小説を書かれた仏教関係のミッションで、一年下に山崎さんが在学しておられました。

毎朝、西本願寺系津村別院の^{おおみどう}大御堂の前に整列して朝礼があり、校長氏が訓示。そんな時に、よく言われた言葉なのです。朝礼に数珠をもっていつて礼拝するような学校ですから。そして「如来大悲^{だいひ}のおん徳は身を粉にしても報ずべし」という「恩徳讃」を歌うような毎日でした。「授業」ではそんなことはありません。教科書にのっていたわけではなく、また、印刷物でもありません。誰がつくった句かどうか全然その根拠は存じません。ただ、坊さんである校長が朝礼の時に合掌しながら、「仏の加護、親鸞聖人の法に逢うよろこびへの感謝」としての念仏をとえ、そういう話に加えて、この句をよく暗誦させられました。「こういうモロ（※脆）いものだから信仰せよ」という催促であって、戦死の美学とはまったくちがっていました。しかし、戦争がおこっても反戦的なことは一言もいわれませんでした。本来なら、仏法にも「殺すな」の教義があって、その教義のためにも反戦はとなえなくてはならないと思うのですが……。

「祈り」は絶対に「要求」であってはならないともいわれました。「感謝」でなくてはならないのです。そうなると国が戦争し、天皇が命令を下すと、

この宗教的な句はすべて戦争につながる結果をきたします。

わたしは病気のため学校に通えず、結局、一年と二年のはじめをちょっと行った程度のことですが、それでも強烈におぼえこんでいるわけで、これは当時の同校生はみんなよく覚えているでしょう。先生方も校長の命令ですし、宗教的なことですから、「誤り」とは思っていなかったと思います。

先日の天皇のTVはひどいものですね。^{なさけ}情なくて、言葉もない感じです。いったい何だろうか。

とりいそぎ、失礼いたします。お元気で、よいお仕事を。

注

- (1) ^{そうあい}相愛高等女学校。大阪の北御堂津村別院（御堂筋本町）にあった。岡部の生家（当時の住所は、大阪市西区^{いたちぼり}立売堀北通一丁目三番地）から歩いて通える距離にあった。
- (2) 山崎豊子（1924-2013）。山崎は相愛高女のあと、京都女子専門学校（現、京都女子大学）国文科に進んだ。『暖簾』『花のれん』『ぼんち』『花宴』『大地の子』『運命の人』等の作品がある。

〈26〉 1975年（昭和50）12月18日

（葉書、印刷） 10円切手 転居通知兼賀状

表 〒346 久喜市吉羽一九五〇一三

裏 〒603 京都市北区出雲路松ノ^{いずも ちまつ}下町^{した}16

京都北 50・12・18 8-12

1975年も、あと旬日。

お事多いなかにもお元気にすごしのことと存じます。本日下午記に移転いたしました。お手数でございますが、よろしくご訂正おきくださいませ。なお勝手でございますが、このたびは新年の賀状を失礼させていただきま

竹 長 吉 正

す。どうか春待の日々をお大切に。よき新春をお迎えくださいますようお願い申し上げます。

〈27〉 1977年（昭和52） 1月1日

（葉書、印刷※一部、ペン書） 20円切手 年賀状

表 〒346 久喜市吉羽一九五〇一三

裏 〒603 （同前、印刷）

京都北 52・1・1 年賀

1977年、揺れ動く世界の新しい暦は、どのような展開をみせるでしょうか。

本年もどうかお元気でご活躍くださいませ。

（※以下、ペン書）

おすこやかに

〈28〉 1978年（昭和53） 1月1日

（葉書、印刷） 20円切手 年賀状

表 〒346 久喜市吉羽1950-3

裏 〒603 （同前、印刷）

京都北 53・1・1 年賀

1918年……。

ご越年おめでとう存じます。年があらたまりますたびに、いまさらのようになのちのふしぎが思われます。本年もどうかよろしく願い申し上げます。いよいよ おすこやかにお過しくくださいませ。

〈29〉 1978年（昭和53） 12月30日

（葉書、印刷） 20円切手 年賀状

表 〒346 久喜市吉羽一九五〇一三

裏 〒603 (同前、印刷)

西陣 78・12・30 18-24

1979年の新春を迎え、おかわりなくご越年のこと深くおよろこび申し上げます。どうか本年もお元気にお過しくくださいますよう。そしてお心たのしくいらっしゃいますようにと、お念じしております。

〈30〉 1979年(昭和54) 3月21日

(葉書、ペン書) 10円切手2枚

表_上 〒346 久喜市吉羽1950-3

表_下 〒606 (同前 ※印刷)

京都北 54・3・22 8-12

先日、ご依頼状^(注1) 拝見しましたが、枚数とか期日とかが書かれていなく、よくわかりませんが、いつでも、何枚でもよろしいのでしょうか。ねたり起きたりの仕事で、なかなか予定通りに進まず、いつも手いっぱいの状態です。書け次第にはお送りしたいと思います、よろしくご了承下さい。

かしこ。

注

- (1) 灰谷健次郎の仕事と作品について何か書いてほしいという依頼状だった。当時、竹長は『現代詩への架橋』という誌名の詩研究雑誌を編集していた。岡部のエッセイ「分厚い情愛を構築する詩のせかい——灰谷健次郎の涙——」は半年後に届き『現代詩への架橋』第四輯(詩研究会 昭和55年1月) 27-29ページに掲載。

竹 長 吉 正

〈31〉 1979年（昭和54） 8月8日

（封書、ペン書） 200円切手 1 枚、10円切手 1 枚

速達 便せん 1 枚、原稿同封

表 〒346 埼玉県久喜市吉羽一九五〇―三

裏 〒603 （同前、印刷）

京都北 54・8・8 8-12

久喜 54・8・9 12-18

竹長吉正様

たいそう遅れて^(注1)、皆様にご迷惑をおかけいたしました。とりいそぎ、不充分ですが書きましたので、お送りいたします。

あまりすいこうできませんでしたので、へんなところはお切りください。それでも何度か書きつづしたのです。

それでは どうか 皆様によろしくおわびをお伝えください。

一九七九、八、八

岡部 伊都子

注

- (1) 1979年（昭和54）3月に依頼した原稿。岡部のつけた題は「分厚い情愛を構築する詩のせかい ― 灰谷健次郎の涙 ―」。この原稿は雑誌『現代詩への架橋』第四輯（1980年1月）に載る。

〈32〉 1979年（昭和54）12月31日

（葉書、印刷※一部、ペン書） 20円切手

年賀

表 〒346 埼玉県久喜市吉羽一九五〇―三

裏 京都市北区出雲路松ノ下町16
いずもち

1980年がはじまりました。

この時代、どのような世界が展開いたしますことか。どうか、自然も人も美しくよみがえりたいものでございます。

本年も御元気でお越し下さいますようにお祈り申し上げます。

1月1日

岡部伊都子

(※以下、ペン書) まだ印刷されないなら^(注1)、書き直しさせていただきたい位でした。徹夜でいそいで書いたのですから。

ご本、ご労作の中で引用していただき^(注2)、恐縮しました。

注

- (1) 『現代詩への架橋』第四輯の掲載原稿のこと。四ヶ月ほど刊行までに時間がかかったので、そのことを苦にしていた。
- (2) 拙著『文学教育の坩堝 ― ことばを通しての人間再生 ―』（教育出版センター 1979年7月）所収「現代詩教材の発掘とその実践」で岡部の詩二篇「うちは何やろ」「売ったらあかん」を取り上げたことを指す。

〈33〉 1980年（昭和55）7月29日

（葉書、ペン書） 20円切手

表上 〒346 久喜市吉羽高田1950-3

表下 〒606 （同前 ※印刷）

京都北 55・7・30 8-12

御ハガキ拝見いたしました。8月は中旬ずっと予定がたっています。17日は日曜日ですが、17日の午後2時からの1時間ほどでしたら、お目にかかれると存じますが、竹長様のように童話童詩の勉強もしておりませんし、

竹 長 吉 正

よく読むこともできておりませんので、来て下さってもお話できる内容は乏しいと思います。うちには冷房がありませんので、お暑いことですし、どうなさるか、改めておハガキ下さいませ。

〈34〉 1980年（昭和55）9月4日

（封書、ペン書） 50円切手+10円切手

便せん2枚（うち1枚は富山妙子の住所・電話番号などを記したもの）

「倒れたものへの祈禱 — 1980年5月・光州」と題するパンフレット1枚を同封。

表 〒346 埼玉県久喜市吉羽一九五〇—三

裏 〒603 （同前、印刷）

京都北 55・9・5 8-12

先日はご遠路 お疲れさまでした。富山妙子さんに「リトグラフをほしいと思っているとお話があった」と伝えましたところ、「東京へ出ておいでのついでに一度、家まで来て、自分で好きなものを選んでほしい」というお返事でした。前もって電話でご連絡の上お寄り下さい。

こんど、灰谷氏と対談することになりました。お話があって、どうしようかなと大分迷いましたが、ご挨拶もせずに引用していることが多いので、この際とおってお目にかゝることにしました。

それでは又、とりいそぎ。 かしこ

御元気でいらして下さいませ。

〈35〉 1980年（昭和55）10月30日

（葉書、ペン書） 100円切手+70円切手 速達

表上 〒346 久喜市吉羽高田1950-3

表下 〒603 （同前 印刷）

京都北 55・10・30 12-18

久喜 55・11・1 0-8

せっかくのご連絡^(注1)ですが、このたびはご容赦願いたく存じます。

寒くなりました。

お大切に。

とりいそぎ 御返事迄

草々

注

- (1) せっかくのご連絡 年末におうかがいしたいとの手紙に対する返事。仕事が入っていて多忙の故と思われる。

〈36〉 1981年（昭和56）1月1日

（葉書、印刷） 20円切手 年賀

表 〒346 久喜市吉羽一九五〇―三

裏 〒603 （同前、印刷）

1981年になりました。次々と目まぐるしく移り変わる世の中でございますが、おかわりなくお過しでいらっしゃいますか。

何を見ましても、世界のいたみが思われます今日、心の深みになんとか清澄な空間をと願っております。

本年もどうかよろしく願い申し上げます。

1月1日

〈37〉 1982年（昭和57）1月1日

（葉書、印刷※一部、ペン書）（40円＋1円）印刷スタンプの年賀葉書

表 〒346 久喜市吉羽1950-3

竹 長 吉 正

裏 〒603 （同前、印刷）

1982年の暦が開かれました。

この年もどうかお元気にお過ごし下さいますようお願い致します。

1月1日

（※以下、ペン書）お大切に。

〈38〉 1983年（昭和58） 1月1日

（葉書、印刷※一部ペン書） 40円切手 年賀

表 〒346 久喜市吉羽一九五〇一三

裏 〒603 （同前、印刷）

京都北 58・1・1

1983年の空が明けました。

どのような歴史の刻まれる年でしょうか。

本年、どうぞお元気でお過しくださいますよう、お祈り申し上げます。

1月1日

（※以下、ペン書）『心のふしぎをみつめて』チクマの少年図書館がやっとできて、よろこんだとたん、自分の至らない言葉の足りなさや、まちがいを発見しました。秋、再販で訂正ができ、うれしいことでした。

お大切に。

〈39〉 1983年（昭和58） 2月27日

（葉書、ペン書） 40円切手

表上 〒346 久喜市東3-11-15

表下 〒603 （同前 ※印刷）

京都北 58・2・28 12-18

それでは 3月22日 PM.1 (※午後1時) お目にかかせていただきます。

たいへんな世の中ですね。

どうぞお大切に。

〈40〉 1984年(昭和59) 3月2日 (※2月12日を訂正している)

(封書、ペン書) 60円切手 便せん2枚

教科書指導書(教育出版・小田切秀雄ほか編『現代文』『断腸花』)

コピー1枚同封

表 〒346 久喜市東3-11-15

裏 〒603 (同前、印刷)

京都北 59・3・4 8-12

きびしいお寒さの日々、先だっではお案じ下さいまして、ありがとうございました。

『心のふしぎをみつめて』をご批評^(注1) くださってうれしく拝見いたしました。

今は、殆んど読むという作業がなされないような状態ですが、一つには、いゝ本が次々とできています。それを読んで勉強したいのに、勉強できない無念な毎日です。

昨年、小田切先生の編集^(注2) に入りました教科書の先生用の解説は、長文で細やかで、おどろきました。後ろに(※教科書の末尾に)別記してある数人の先生のどなたかが書いて下さったのですが、書き手として恐縮したことです。初めの一頁分だけ、コピーを同封します。

『心のふしぎをみつめて』^(注3) は、わたくしの遺言と思って書いた緊張の仕事でしたのに、中に明らかな間違いが二点^(注4) ありました。「綿の花から綿が出るのではなく、実がわれると種が白い綿をまとってでてくる」、「コアラセイトウ」と書いたのは「オオアラセイトウ」、情けないことでござい

ます。

3月28、29、どちらでも、只今なら午後二時から一時間ほど、よろしくございます。

日を決めてご連絡下さいませ。

注

- (1) 竹長は「高校生に薦めたい二冊の本」(筑摩書房『国語通信』第261号 1984年1月)で、茨木のり子『詩のころを読む』(岩波ジュニア新書)とともに、岡部の『心のふしぎをみつめて』を取り上げて、論評した。
- (2) NHKテレビの教養特集「古典と現代」(1972年放映 制作・NHK大阪教育部)の「御伽草子」に岡部が出演したとき、その司会が小田切秀雄だった。そのような機縁もあり、小田切編集の高校国語教科書に岡部の文「断腸花」が収録された。
- (3) 岡部の『心のふしぎをみつめて』は筑摩書房より「ちくま少年図書館62」として刊行。初版第1刷は1982年3月30日。
- (4) まちがいが二点というのは、次の二箇所。一箇所は「あなたは木綿^{もめん}の花をごらんになったことがありますか。小さなつぼみが開くと、まっしろな綿^さが咲きだします。ちゃんと、あんな^{きよ}淨らかな^{せんい}繊維が、花として咲きだしてくるのです。」(初版本63ページ)。もう一箇所は、「わたくしは、道ばたにたいそう^{かれん}可憐な紫の花が咲いているのを見て、『この花の名はなんといいですの』と、たずねたことがありました。『さあ、菜の花といってるよ』とか、『大根だよ』とか、『知らんね』とかの答えが戻ってきて、長い間、花の名がわかりませんでした。……(中略)……のちに、このうす紫色の花は、花大根ともよばれるコアラセイトウではないかと思い当たりました。」(初版172～173ページ)。前者は岡部がこの書簡でいうように、綿の花からすぐに綿が出るような書きぶりである。また、後者は、この紫の花は正しくは「オオアラセイト

ウ」であった。いずれも、再販本で訂正された。

〈41〉 1990年（平成2）11月30日

（葉書、ペン書） 41円切手

表上 〒346 久喜市東3-11-15

表下 〒603 京都市北区出雲路松ノ下町16

京都北 90・11・30 8-12

先日は思いがけないところでお目にかかって^(注1)、一瞬ぼうぜんとなりました。ちっともお変りありませんが、もすこしおこえ（※お肥え）になっても……と案じられました。

まさか、竹長さんに話を聞いてもらえるなんて思いませんでしたから、歳月って何かしらと、ふと。

また わが家へもお寄り下さい。

注

- (1) 第2回京都私学図書館フェア(1990年11月10日出) 於・光華女子学園講堂)の第1部が講演で岡部が「沖縄と私」と題して話をした。その後、第2部としてマリー・ウィズメデューサ(喜屋武マリー)のロックコンサートがあった。この催しを企画した人の中に私の知人(成安女子高校の深谷純一氏)がいたし、私はこの頃、同志社大学に内地留学していたので、喜んで出かけた。岡部には何の連絡もしてなかったので驚いたわけである。

〈42〉 2000年（平成12）4月5日

（葉書、ペン書） 50円切手

表右 〒346 埼玉県久喜市東3-11-15

表左 〒603-8133 京・北区出雲路松ノ下町一六（※青色ゴム印）

先日は、せっかくいらして下さったのに^(注1)、何もできませず、申しわけありませんでした。

お待ちしているのですが、お手もちの小著のリスト、まだいただけません^(注2)。ご遠慮なく、どうぞおっしゃって下さいませ。もう手もとに無い本が多くなりました。

お便りよろしく。

注

- (1) この年3月26日、27日と一泊二日の京都旅行。27日（月曜）午後3時～4時20分、岡部宅を訪問。先生は小生の訪問日を忘失していた。どの客人に対しても事前から念入りに「もてなし」の準備をされるのが通常だった先生からすれば、今回は明らかに「失態」だったわけであり、そのことを悔いて「何もできませず……」の言葉となったのだろう。この日、私は先生とよも山の話をした。先生は席を立つとき、ふらふらと、時々、よろめかれた。しかし頭と心はしっかりしていた。3月6日の誕生日で満七十七歳になられたという。今年1月、早大で学生を前に講演されたという。窪島誠一郎氏（信濃デッサン館・無言館の館主）の手紙をスクラップ帖から見せてくれた。先生のお兄さん（戦没兵士）の手紙等遺品をすべて無言館に寄贈することができて安心したと語られた。
- (2) この日（3月27日）、「私の本で、持っていないのがあったら送るから。」と言われた。この頃、先生は自分の書いた本を「形見」のようにして知人友人に送っていた。私だけでなく、かなり多くの人に自著を送っていた。本の印税はもらっても、そんなに使い途^{みち}はないから、生活費の他に余りが出たら、その分^{ぶん}を本でもらって知り合いにあげるんや、先生はよくそう言っていた。

〈43〉 2000年（平成12）8月5日

（宅配便） 中に手紙、新聞コピー、写真など

〒919-1123 福井県三方郡美浜町久々子50-12

竹長まき様方 竹長吉正

〒603-8133 京都市北区出雲路松の下町16

岡部伊都子

2000・4、思いがけなく スウェーデンの一流雑誌『オールド・フロント・マガジン』^(注1)に昔の小文をのせていただきました。これは在日三十年といわれるシャスティーン・ヴィデーウス様と、その仲好しの日本人平田倫子^{しなこ}様とが、既著の中から「石の道」と「石仏のお声」^(注2)とをスウェーデン語に翻訳して送って下さったお蔭です。私は日本語も怪しい人間で、まさかこんな晴れがましいことになるなんて思っていませんでした。りっぱな『オールド・フロント』編集長ラーシェ・オーケ・アーグストン様のお力で、日本の心を初めて知っていただけたのです。p.58、59、60、61^(注3)、せめてチラとごらん下さいませ。

（※以下、封筒の表にペン書）もっとお送りしなくてはならないのです^(注4)、もう一冊も無くなっているのが多いので、出版社に残っているもの（※を）手もとに届けてもらって、僅かしかありませんが お送りします。

写真在中

注

- (1) Ord Front Magasin 4/2000 スウェーデンの雑誌。A4判で100頁前後。
- (2) 「石の道」(Stenväg) は岡部の著『女人歳時記』（河原書店 1967年）より、また、「石仏のお声」(Stenbuddhornas röster) は『水平へのあこがれ』（明石書店 1998年）より。
- (3) 前出(1)の『オールド・フロント・マガジン』2000年4月号の58～61

ページに「石の道」「石仏のお声」の文章、石仏の写真（撮影・入江泰吉）、岡部の写真（撮影・記者※平田氏、ヴィデーウス氏）が載っている。

- (4) この宅配便（ヤマト便）は竹長の郷里の家に届けられた。この年の3月、岡部宅を訪ねた折、郷里の美浜町立図書館に「先生のご著書を数冊寄贈した」と話したことがあり、そのことをおぼえていて送ってくださったものと思われる。先生は2000年、満七十七歳を境にして、「ある強い決心」をされたものと考えられる。封筒に「写真在中」とあるのは先生のご自宅から近い鴨川のほとりを、桜満開の頃、散歩されている御姿の近影二葉。

〈44〉 2003年（平成15）4月23日

（封書、ペン書） 便せん2枚 80円切手

表 〒346-0016 埼玉県久喜市東三丁目十一、十五

裏 〒603-8133 京都市北区出雲路松ノ下町16

京都北 15・4・24 12-18

このたびはお揃いでご来宅^(注1) 下さいましてありがとうございます。いただいたお写真をアルバムに張って大切に拝見しております。

今回の「シカの^{しろ}白ちゃんと伊都子の出会い」展^(注2) もお蔭さまで 遠近多くの方々が来て下さり、下手な話もトークも たのしく受けていただいて終わりました。

お近くだったら……と思いました。ずい分遠いところからも、未知の方々お越し下さって「伊都子ファミリーだね」と言われました。こんな幸せな思いをさせてもらっていいのかなと恐縮しているところです。

ありがとうございました。

注

- (1) この年3月18日(火)、妻君子と共に先生宅を訪ねた。
- (2) 「シカの白ちゃんと伊都子のお会ひ」展はこの年4月8日(火)～4月13日(日)、ギャラリーヒルゲート（京都市中京区寺町通三条上ル535）で開催された。白ちゃんを撮影した写真や、白ちゃんを描いた絵が展示されたり、『シカの白ちゃん』韓国語版の紹介があった。また展示期間中の4月12日(土)には日本キリスト教団洛陽教会（上京区寺町通丸太町上ル東側）で岡部と窪島誠一郎氏との対談があった。竹長の次女史が小学生の時、『シカの白ちゃん』を読書感想文に書いたことがあり、そのことを以前、伝えてあったので、先生は史にも会いたそうだった。史は社会人となっており、仕事の関係で都合がつかず、また、私も所用があり、このイベントには参加できなかった。残念である。

〈45〉 2003年（平成15年）5月17日

（郵便小包中の封書、ペン書） 一筆箋

ごめんなさい。日誌に書かれていた時の「ざんげ」が、見当らず、先生^(注1)が私にふれて下さったものばかり、ていねいにはってあります。

1953・54^(注2)といったところ、世間しらずの私、おゆるし下さい。

先生のご本もあるはずですが、どこをどう探したらよいのか。

ごめんなさい。

注

- (1) 「先生」とは、^{またにるいこつ}眞溪涙骨のこと。岡部は眞溪のことについて、「〈連載〉思いこもる人々24」（藤原書店の小冊子『月刊 機』2003年2月号）で取り上げた。これを読んで私は眞溪の宗教新聞『中外日報』に関心をもち、問合せたところ、この手紙及び新聞コピー、本を送られた。

- (2) 眞溪涙骨のことは、「ざんげ一つ、そのざんげも自慢であつたら地獄の業だよ」は『中外日報』の常設コラム欄《日誌》（例えば『朝日新聞』の《天声人語》、『毎日新聞』の《余祿》、『読売新聞』の《編集手帳》のようなもの）の1953年（昭和23）6月20日号に出てくる。それをふまえて岡部は『中外日報』同年7月2日号に短文「ざんげ憧憬」を書いている。なお、「1953」は1953年であるが「54」と言う数字が何を指しているのか不明。たぶん、1954年のことではなかろうか。スクラップ帳の分類年号かと思う。竹長は西郷中学校時代の恩師眞溪義成先生（クラス担任、理科主任）が印象に強くある。義成先生は浄土真宗派の僧侶で、こわかった。親切なところもあったが、へんくつで頑固な一面があり、わたしのまわりの子どもはたいてい、びくびくしていた。いつ、マタニの雷が落ちるかヒヤヒヤものだった。しかし、わたしはどういうわけか先生に気に入られ、理科が好きになった。涙骨さんとは別人だが、真宗派の人という点で、義成先生にも似た面があったのではなかろうかと思う。そんなことを想起した。

〈46〉 2005年（平成17）2月16日

（葉書、印刷） 50円スタンプ

表 〒346 埼玉県久喜市東3、11、15

竹長 吉正

裏 〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町六〇三番地二

グラン・シティオ京都駅北通り五〇一号

（西洞院通り七条下ル）

岡部 伊都子

京都中央 17・2・18 18-24

二〇〇五年になって、もう二月になりました。

お元気で過ごしのことと存じます。私もお蔭さまで、何とか無事に過

ごさせてもらっておりますが、これまで三十年近く住まわせてもらった出雲路の家を出て、京都駅近くのマンションへ移りました^(注1)。ここには甥一家が住んでおりますので、何かあれば助けてもらえます。流転人生も、これで終わりかなと、戦争や病気、仕事などで、転々と十五回近くも転居してきた運命をかえりみて、どの家にも「ありがとう」とお礼を申したい気持ち……お笑い下さい。

それでは新住所からのご挨拶、今後もよろしくお願い申し上げます。

注

- (1) 岡部はこの年3月6日で満82歳となる。体調の不安を覚え、甥一家の住むマンションの一室に転居した。そして、2008年（平成20）4月29日午前3時59分、死去。病名は肝臓癌。享年85歳。主治医島津恒敏氏のお話によると、岡部は2000年に肝臓癌の発症を知らされていたが、肝硬変はなく比較的元気な生活を送っていたという。その後入院を繰り返したが、2007年9月以降、呼吸不全や息切れが目立つようになり、在宅で酸素濃縮機を設置し酸素吸入を行ったりした。2008年4月23日、京都市立病院に入り4月29日早朝、亡くなった。5月31日、同志社新島の^{しの}偲ぶ会があった。私は妻君子と共に参加した。七百人が花をたむけた。